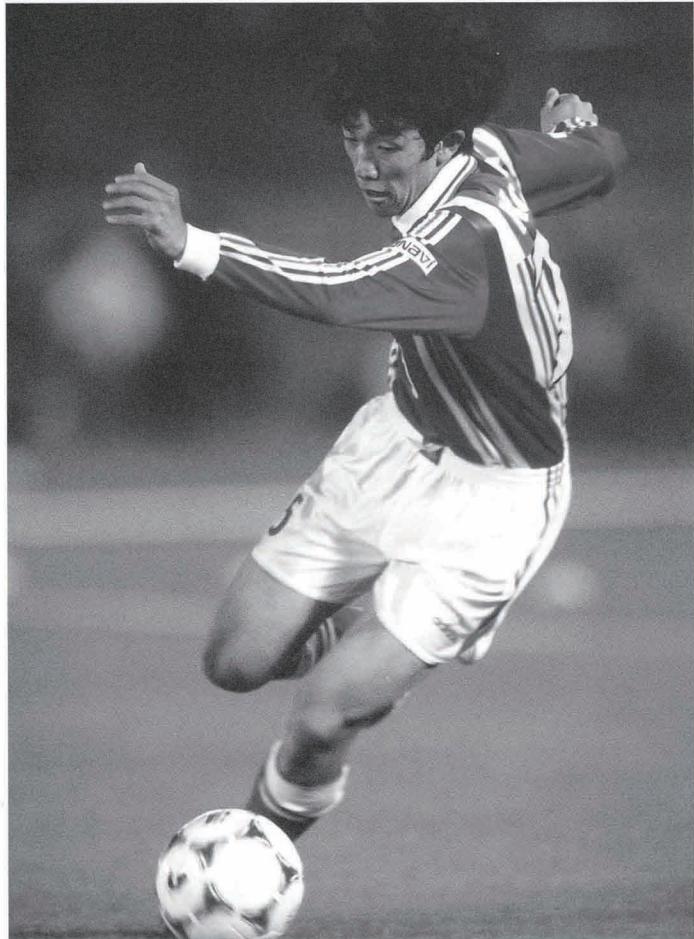


A J P S

日本スポーツプレス協会会報
ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE

NEWS



AJP

19
MARCH.10
2001

SPECIAL INTERVIEW 『山崎浩子インタビュー「ゲスト・奥野史子」』
PORTRAITS IN SPORTS OF THE 20TH [写真集製作顛末記]
AUTO FOCUS REPORT [キャノン EOS-1Vレポート]
INFORMATION



表紙は語

語る 2002年ワールドカップのチケット予約受け付けが2月15日からはじめた。いよいよアジア初のワールドカップも、残すところ1年とちよつと。名称問題とかいろいろと解決しなければならない問題も多いが、なにより地元の日本と韓国が決勝トーナメントに進めるかどうかが、大きな問題。やはり開催国が最早負けたのでは大会は盛り上がらない。

中村俊輔にとって2000年は決して良い年ではなかったよう思う。しかし、いつも追風ばかりか吹くわけでもない。今年、来年と徐々にパフォーマンスとモチベーションを上げていけば、必ず本番のワールドカップでは彼の最高のプレーが見られるような気がする。

そして、中盤で彼のプレーが機能したとき、日本代表の大躍進がはじまるだろう。その時を刮目して待ちたい。

兼子慎一郎
Skin-ichiro KANEKO

■撮影者プロフィール
1967年2月9日、
神奈川県生まれ。日本
ジャーナリスト大
学学校 フォト科
1991年卒。鎌倉高
校時代サッカーチー
ア。その後、サッカ
ー部に所属。現在は
サッカーボランティ
アとして活動。元サッ
カーチーム監督として
活躍する。現在は「ル
・ルチ」で2002年世界
杯開催を前にした取
材を行っている。

CONTENTS

- 3 INTERVIEW
「手元、キャスター、そしてショーカーの世界へ」
奥野史子／山崎浩子
 - 8 「20世紀スポーツの肖像」製作顧未記
無名の悲しみ 白醍龍幸
 - 10 オリジナル・カメラリポート
キヤノンEOS-1v 藤田孝夫
 - 13 インフォメーション

foreword

BSデジタル放送って、何?

田尻 格

昨年9月からBSデジタルの試験放送が始まった。12月からは本放送も開始された。

NHKのウリは、シドニー・オリンピックの放送だった。取材費を捻出できない身としては、少しでもキレイな映像で觀戦したいのだが、いかんせん、値段が高い。家電量販店の店頭で見たハイビジョン(HDTV)映像は、約40万円(専用チューナー内蔵)も出して見たいとは思わなかつた。現行のNTSC方式との解像度の差は、30インチ以上でないと、わからないのだ(売られているのは、32インチ以上だから、ギリギリわかる程度)。

HTDVは、データ放送(番組連動型と独立型)、双向方向サービス、CDと同等の高音質、局によっては5.1チャンネルのサラウンド也可能。データ放送は世界初のシステムで、コンテンツの充実次第では、原稿の記録確認などに使えそうだ。双向方向サービスは、スカパーと同じように、電話回線をアップロードに使う。

地上波デジタル放送の先駆、アメリカでは放送開始から2年以上たった現在、HDTV放送は1ウイークで数時間しか行われていない。経営的に成立しない、ニーズがない、見たいと思う人が少ないのだろう。もちろん、CATVがインフラになっているという背景の違いはあるが。どうやら、東京オリンピックでカラーTVの普及に弾みがついたように、HDTVが売れる状況にはなさそうだ。

ところで、デジタル化を先に進めたCSは、BSと同じ東経110度に今夏次期衛星を打ち上げて、放送開始（高精細放送も予定）となる。同じ方向なのだから、技術的にはアンテナを共用できチューナーも複合化できるハズなのだが、統一されるかどうかは、総務省と放送局、家電メーカーの利害の調整次第といったところだ。

こうなると、BSとCSは放送できる機能は同じだから、放送法上の名前が違うだけで、本名とペニネームほどの違いもなくなる。ハードは待てば待つだけ、高機能で低価格化が進むのだから、今夏の110度CS放送開始まで待って、専用チューナー内蔵型を購入する方が賢いかもしないわ。

一方では、地上波デジタル放送を2003年末までに、関東、近畿、中京の3大都市圏でスタートさせる計画も進んでいる。実現すると、また、専用チューナーが必要となる。

また、数年後にはインターネットと放送の境がなくなり、後10年も経てば、ライブ放送をインターネットで視聴するのが当たり前になっているかもしれない。

いずれにしても、アナログBS放送終了予定の2007年、アナログ地上波放送終了予定の2010年までは、買い時とサイフの中身と相談しながら、頭を悩ますことになりそうだ。

選手、キャスター
そして
ショーカーの世界へ

数多くの国際舞台を経験してきたが、そればかりが違う。世界中の人们が注目していることが、その心を躍らせるのか。4年に一度しかない「オリンピック」で銀メダルを獲得したが、選手たちは歓喜と緊張の中での限界に挑戦し、あるいは夢敗れ、あるいは夢を形にする。そして宴のあと……自分が手にしてきたものを振り返り、行くべき道を模索する。20世紀最後のオリンピックもシドニーで幕を閉じたが、バルセロナ五輪で銅メダルを獲得したシンクロの奥野史子さんに、宴のあとを聞いてみた。

A black and white close-up photograph of Japanese actress Aoi Ochiai. She is looking slightly downwards and to her left with a gentle expression. Her dark hair is styled with bangs. She is wearing a dark, short-sleeved top. At the bottom right of the frame, there is overlaid text. The word "INTERVIEW" is arranged vertically with a small diamond symbol between the "I" and "N". Below this, the name "奥野" is written in large, bold, vertical kanji characters.

Fumiko OKUNO

Photo by Masaomi Arakawa

史子

[インタビュー] 山崎浩子

食べるのも仕事だった現役時代

山崎 シドニーオリンピックを前にしたシンクロの選手たちを取材に行ったんですけど、ほんとに厳しい練習をしてましたね。本格的にウェットトレーニングを取り入れたということで、いい体もしてましたしね(笑)。

奥野 そうですね。井村(雅代・ナショナルヘッドコーチ)先生は昔から新しいものを取り入れてきて、私が高校生ぐらいの時から、血液検査しながら体の状態を見たり、トレーニングを組んだりしてましたからね。

山崎 食生活も大変だという話ですが。
奥野 大変ですね。私も軽く一日4000カロリーは食べてましたよ。考えられないでしょ、新体操の人とか。

山崎 うーん、考えられない(笑)。別に普通の食事をしてたら太るわけもないんだけど、どうしても思春期というか、食べたら身につく時期であったりして、プロポーションを保つために、あまり食べてはいけないとという考え方がある。そうするとかえて食べたくなって、普通の人はケーキは1個食べれば済むはずなのに2、3個食べないと気が済まない。一種の病気みたいな感じになるんですねよ。

奥野 シンクロの場合、夜食は当然ですね。寝る前にケーキ、シュークリーム、プリンとかガツガツ食べて、プロテインを入れたミックスジュースを飲んで。それでも痩せていくんですよ。

山崎 まあ、水の中であれだけの運動量があれば、食べる量が追いつかないのがもしませんね。それにしても、奥野さんは94年の世界選手権で見事な「夜叉の舞」を披露して、史上初の芸術点オール10点満点を獲得されし、広島アジア大会でも優勝で、まだまだこれからという印象があったときに引退されましたよね。私としてはもったいない感じがしてたんです。

奥野 持病の腰痛があたりして、体力的に劣っていく陰を自分で感じたんですね。それでもやめよう。

山崎 それから、どうしようと考えてたんですか。

奥野 現場で指導したいという気持ちも



インタビューは、奥野さんがカナダへ出発される直前、2000年の7月27日、奥野さんの故郷・京都でおこなわれた

photo by M.Arakawa

あったんですけど、シンクロの現場に戻るのが辛くて。

取材する側になって分かった事

山崎 辛いっていうのは?

奥野 なんか、もう塩素の匂いさえ嗅ぎたくないという、そんな状態で。あと、一緒にチームを組んでた選手達はまだ頑張っているわけで、私だけ「一抜けた」みたい

なじだから、行くのが辛くて全然顔も出さなかったんですよ。だから一旦現場を離れて、外からシンクロを見てみようと思ったんですね。

山崎 最初はどういうお仕事をなさったんですか。

奥野 国際限定のスポーツ番組でパーソナリティーみたいなことをやってたんですよ。様々な競技の選手たちにインタビューをしたり。

山崎 いろんな物を見聞きしてビックリした事や感じた事はありますか?

奥野 シンクロの世界で17年ぐらい競技者としてやってきたら、山崎さんもそうだと思いますけど、頭が固まるんじゃないですか(笑)。凍りついてるでしょ。だから

山崎 出た瞬間にそれを解凍するのに時間がかかりましたね。



山崎 Hiroko YAMAZAKI

1960年1月3日、鹿児島県生まれ。高校時代に新体操を始め1983年世界選手権に参加。1984年のロサンゼルス・オリンピック8位入賞。東京女子体育大学卒。現在スポーツライターとしてさまざまなスポーツをカバー。「スポーツ・グラフィックナンバー」「毎日新聞」「大阪人」などに連載。競技者の経験を生かし、選手の心理に迫っている。1995年にAJPSに入会し監修委員会所属。

ば、いろんな人がいらっしゃいますけどね。

山崎 大体は朝まで飲んだりとかしてます。それが許せなかった。

奥野 はい。それで何で試合に出るんだろうと。でもだんだん頭が柔らかくなつていけば、プロには私たち以上の、違う所からのフレッシャーがあつたりとか、そういう現実が見えてきた。それにプロの試合はやっぱり面白いですよね。反対にアマチュア競技の試合って、何が良くて何が悪いのかわかりにくかったりして、すごくつまらないじゃないですか。

山崎 新体操も探点競技だから、そのへんがわりにくいと思いますね。

奥野 何でこの人はこんな良い点数が出て、この人には点数が出ないのかとか。

あとは、試合の形式がすごく地味になつて感じるようになったんですよ。選手の時はそれが当たり前だと思ってたんですけど、外の世界に出てみたら、もっとお客様を惹きませられる演出がたくさんあるように感じた。だからプロの良い部分がもっとアマチュアに浸透すればいいと思うし、アマチュア精神のすばらしい所がもっとプロに浸透していくべきだと思います。お互いがもっと歩み寄る必要があるなって感じたんです。

山崎 昔はプロとアマってすごく区別さ

れてましたけど、奥野さんの時代は、まだアマチュア規定が厳しい時代でしたか。

奥野 そうですね。

山崎 私なんか、タレントと同じ画面に出してはいけない。もし出たら、同時にプロという扱いになるから、それからはアマチュアと接触してはいけないなんて言われたこともあったんですよ。野球なんかもプロとアマが交流を持つようになったのは最近ですよね。シドニーでは合同チームを作った。まあどう考えても、長嶋監督が長嶋一茂を教えちゃいけないっていうのは変だなって思いますよね。

奥野 そういうところは、もっと緩和させていくべきだと思いますね。それと、シンクロとか新体操って、プロの興行がもっと成り立つてもいいと思うんですよ。

山崎 新体操もそうですけどシンクロのプロはまだないんですよね。

奥野 はい。日本ではまだ。

山崎 プロで生活が成り立てば、現役を引退した人達の活躍の場が広がりますよね。

奥野 そうです。新体操にしてもシンクロにしても10年以上同じ競技をずっとやって、それを活かす場が少ない。人それぞれ、進みたい道は違うと思うんですけど、競技としてじゃなく、それで食べていいける環境があればいいなと私も思って

いたんですよ。

新世界への旅立ち

山崎 朝のテレビ番組のレギュラーを降りて、5年間やってらしたスポーツキャスターを一旦やめて、これからシンクロのショーに挑戦するということですが、それはその環境づくりの一歩ということですか。

奥野 そうですね。選択肢のひとつになればいいな。選手の励みになるような環境ができるばいいなと思ったんですよ。新体操もそうだと思うんですけど、現役を辞めたあと、どうしたらいいんだろうって思うぐらい、選択肢が少ないですからね。

山崎 指導をするか、テレビに出るか、大学に残るか、それぐらいですもんね。でもそのシンクロのショーは、現役時代からやりたいと思ってたんですか。

奥野 パルセロナオリンピックの年ぐらいに、『シレラ』という、世界で初めてのシンクロのショーを観に行つたんです。でもその時は、考え方がシンクロの玄人なんで、やっているシンクロの技とかを見てしまつ。いやー、こんなこと誰でも出来るやと思うながら見てたんです(笑)。だけど、現役を辞めてから漠然とシンクロのショーをやりたいと思うようになって、それが現実的になってきたのは、98年の秋からラスベガスで「オー」というショーが始まったことを耳にしてからですね。なんとなく日々の仕事に追われて、自分の持つてたシンクロ的な感性、芸術性を追い求める感性っていうのが鈍っていくのを、自分で感じてたときだったんで。

山崎 テレビでスポーツキャスターとして活躍しているから、そう思ってたということですか。

奥野 そう。テレビってすごく発言に対しての規制があったりとか、表現の仕方がむずかしい……。

山崎 それぞれの番組に合ったカラーの喋り方をしなきゃならないとか?

奥野 そうですね。常に素の自分であることが不可能で、それに合わせて行きながら、どんどん自分を殺していく術を覚えていくんですよね。それが出来るようになるイールその社会では上手く生きて

いけるようになるということなんんですけど、一方でもともと持ってる私の感性は薄らいでいるのが感じられて、それがすごく恐かったんです。だから少しづつ何らかの焦りを持ってきていたんですね。

山崎 昨年からは同志社大学の大学院にも通い始めたんですね。

奥野 はい。さっきお話をしたスポーツのエンターテイメント性を求める為に。私がやろうとしているのは、スペクテータースポーツ……見るスポーツ、見せるスポーツの日本での可能性ということで修論を書こうと思っているんですよ。の中には、今度行くショーや事務書くんですけど、アメリカの方がエンターテイメントスポーツの見せ方って進んでますし、プロスポーツなんて特にそうですね。ジムナスティックにしても向こうは観客動員がすごくて、アトランタオリンピックで体操が活躍してから、アメリカでのジムナスティックの人口ってすごく増えているんです。日本のシンクロは、そういう意味ではオリンピックごとにチャンスがあるわけで。そのためにも、ショーや技をちょっと仕入れてこようか。

山崎 技というのは?

奥野 裏方としてのノウハウを含めて学んできました。この間ショーや観に行きました。終わってからパックスステージまで見せてもらったんですけど、すごいんですよ、その装置が。あの舞台装置は日本では無理ですね。日本の技術を駆使したら当然出来るとは思うんですけど、それだけの費用を使って、ショーやうるういう人たちが日本にいらっしゃるから?と思いつながら帰ってきたんですけど。まあ、いろんなアイデアがあるんだなというのを見てきたんですけど、これからもそういう部分を学びながら、いざ日本でそういうショーやできないかなと思ってるんですよ。

山崎 でもいまの一番の目的は演出じゃなくて出演ですね。

奥野 今回はそうですね。そのためにショーやオーディションがあることを聞いてから、少しずつ練習を始めて。結局オーディション日は仕事で行けなかったんですけど、言われた課題をメールでやってくるところをビデオで撮って送ったんです。そしたら合格です。でも自分では全く納得いっていないんですね。ビデオを見たら、

身体の動きにキレがない。

山崎 奥野史子はこんなんじゃない。
奥野 そうそう(笑)。身体も本当に鈍り切っていて、まだ戻らない。瞬発力はあるんですけど、持久力がないんですよ。

1、2年はカナダでチャレンジ

山崎 これからのスケジュールはどうなってるですか。

奥野 オーディションで50人ぐらい選ばれてるんですけど、その人たちでこれから4ヵ月間、カナダのモントリオールでキャン

ど、別にそこで主役になるわけじゃないんですよ。主役はないショーンです。だけれどもその中で泳いで自分を想像するだけでワクワクする。「レラ」とか、「スマッシュ」とか、水を使ったシンクロチックな舞台はほかにあるんですけど、やっぱり「オーラ」が一番すごいんですよ。そこに関わっている人もすごい。たとえばバルセロナオリンピックのメダリストシンクロパートの演出兼コーチもやっていて、アトランタで金メダルを取ったアメリカの選手とかいるんです。

山崎 楽しみですね。どんなものができるのか。

なった頃だし、テレビの世界というか、ああいうものを制作する側も見えて来た矢先でしたからね。

山崎 それを捨てる事に関しては悩みましたか。

奥野 それを捨てるというよりも、私を一応そこまでしてくれたマネージャーさんとか会社に対して、これまでいいのかなっていう思いはあったんです。だけど私の人生だから。そのままでは、何も変わらないと思ったんですよ。私自身が何となべてテレビに出て、その場その場で凌いで行くような感じ。新しいものを一から作り出しているのかな? っていいたら、経験談

強くないから環境が整わないということも考えられる。強いスポーツには皆注目するし、資金を注ぐんですけど、これから強くなろうとしているレベルの選手や競技に対するバックアップは二の次にされてしまいますからね。それからたとえば、アトランタの体操で金メダルを取れば、みんなの心を寄せて、自分の娘、息子を第二の彼女たちのように思っている親がどんどん増えてきますよね。だけど日本人って熱いすぐ冷めやすい。だからオリンピックが終わって一ヵ月もすればすっかり忘れてしまってる。その熱をいかに持続させるかっていうのも必要だと思う。そ

だけのファンがつくか。

奥野 そうそう。ある意味プロ的な考え方かもしれないんですけどね。Jリーグでは話し方講座とか取り入れているところもあると言うし、そういうふうに、たとえば引退した選手とかが、現役の選手と話を機会を設けるとかで、自分の価値を意識させる事が、まずは必要だと思うんですよね。たとえばドイツだったらブンデスリーガから地域のお爺ちゃんや子供たちと一緒にスポーツをやってる。ということは、選手の声を地域の人達が聞く事ができたりとか、選手もそれを理解して、この人に支えられているから自分達がいるんだって事を、子供の頃から知っているんですよね。そのスタイルがすべて良いかどうかはわからないんですけど、そういうスタイルを日本もやっぱり築かなければいけないです。ただそれは場所も必要だし、理解がなによりも必要。だから今度のそのショーやても、日本のみんなに見てもう感動してもらいうるのは、何よりもまず注目を引く第一歩だと思います。そしたらその人たちが理解してくれて、メールが一つでも日本に出来れば素晴らしい事だと思う、そういう声を上げられる環境、状況に自分を置いておきたい。

山崎 そういう風に思えたのは、すぐに指導者にはならず、一度外に出たからでしょうね。

奥野 多分すぐに指導者になってたら、何も不思議に思わず、ここまで来ると思うんですよ。今考えると良かったと思うんですけどね。

山崎 今は夢溢れている状況?

奥野 いや~不安ですね(笑)。とりあえず、目の事を考えるといつも不安なんですよ。体力が戻ってなかつたり。でも、いろんな可能性がまた一つ広がるんで、それに対してはすごく楽しみです。どちらにしても、それを成功させて帰ってこないと、何も広がりを持たなくなってしまうんで、まあ一個ずつ……選手の時と同じで、とりあえず目の前にあることをなんとかクリアして、それをつなげていきたいと思います。

山崎 引退してから、やっとわかるんですけど、わかった私たちが伝えていかないといけないんですね。あなたがどれだけの影響力があるって、その一言で、どれ



1994年の世界選手権でソロで銀メダルを獲得。「夜叉の舞」は最高の演技だった

photo by T.Fujita



photo by M.Arakawa

を張るんです。それから帰ってきて、無事に契約できれば、1年か2年またカナダに行って、週10ステージをこなすことになります。すべてのステージに立つかどうかはわからないんですけどね。契約が一応1年ずつなんで、その度に更新になると思うんです。それによっては2年にもなるし3年にもなるし。でもずっと向こうに行ったら日本に帰っていくいろいろやさしいことも出来なくなるので。

山崎 あくまで日本でシンクロのショーやりたいためなんですか。

奥野 うーん。それは半分位ですね。半分は単にあそこで泳ぎたいだけで。ショーや見て頂ければわかると思うんですけど

お野 そうですね。昔は、お互いライバルで、気安く話せなかった選手達が、この間会った時には、親友って感じで話ができたんで、それがまた嬉しかったしましたからね。

山崎 でも引退して5年して、それからまたチャレンジ出来るって女の強みみたいなのを感じません?

奥野 何かこう、捨てられるんでしょう。守るものは何もないというか。今回も、今までの事を考えてたら、こんなこと絶対できないです。

山崎 生活も安定してた訳でしょ?

奥野 やつ、自分で自分の言いたいことを、きちんと言葉にして、喋れるように

話をしていたりとか、今までの貯金をはたいてるだけです。それも一つの大切なことだと思うんですけど、そういう状態が果たして今後の自分のためになるのかなって思ったんですね。

山崎 きっとこれから、いろんな自分が発見できるんでしょうね。では最後に、これからの日本のために、日本のスポーツが衰退している原因を1つ、2つ挙げていただけますか?

奥野 うーん。環境じゃないですかね。日本は娛樂施設が多いから、余暇の中でスポーツを楽しむことに割り当てる時間、場所がすごく少ないと思うんですね。逆に言うと、日本のスポーツがあまり

のためには、もっと現役の選手たちが発言をする機会をもって、スポーツのすばらしさとかスポーツの持つ意味を話すべきだと思うんですよね。

山崎 アメリカの選手とかは、発言する内容まで教育されてるみたいだし。

奥野 日本では、選手が自分の立場をわかっていないですね。自分がどれだけ、すばらしい価値を持った人物であるかを知らないし。それはやっぱり教育しないといけないですね。

山崎 引退してから、やっとわかるんですけど、わかった私たちが伝えていかないといけないんですね。

山崎 ラスベガスにショーや見に行くために、お金貯めなきや(笑)。今後の活躍をお祈りしています。本当に長い間ありがとうございました。

名の悲しみ

AJPS 2000年記念事業
写真集「20世紀スポーツの肖像」
製作顛末記

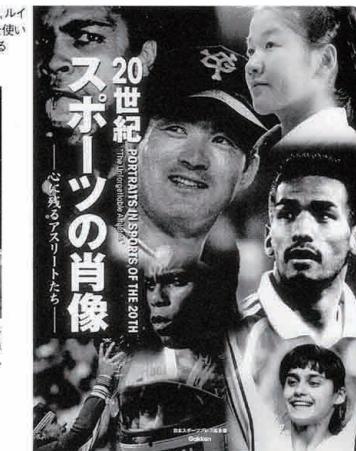
写真集が大百科に変身

「立派な写真集ができましたね」
数多くの方からお褒めの言葉をいた
だいた。そのたびに、なにか面映ゆい気
がしている。

編集委員の一人に名を連ねながら、
わたしは委員長の薬師さんや企画担当
委員長の北川さんにとって良い右腕には
なれなかつたような気がする。そんな
わたしが書く製作顛末記であることをま
ず一言お断りしておく。

でき上がつた「20世紀スポーツの肖
像」を見て、当初AJPS2000年記念事業
特別委員会が意図していた写真集とは
まったく違つたものができ上がつてしま
た、というのが偽らざる心境だ。それはま
ことに出版の労を取つていただいた「学習研
究社」社風にあったのか、「スporte
写真集」というよりも「スポーツ大百科」と
呼んでも、いこうに差し支えない内容
のものになつた。

出版元の意向にかなり引きづられてし



また。しかもAJPSとしては何百万円も
の協賛金を賛助会員各社からいただき、
それを出版元に発行の際収めている。そ
れでもなおAJPSの意向が100%生かされ
なかつたわけだが、どうしてこうなつたの
かとの反省もなく、早々と編集委員会は
解散してしまつた。故にわたし個人として
は「立派な写真集ができた」という実感は
まったくなく、ただ1冊の本が世に出た
という感じなのだ。

今後、AJPSがひとつの組織として写
真集を出版することもあるだろう。その時
に今回の経験が生きるように、「20世紀ス
ポーツの肖像」の編集経過を書き残して
おくことは、製作に携わつたものの責任と
思つてペンをとつた次第である。

会員全員参加は不可能に

最初の編集会議で、この写真集に掲
載する写真は、「20世紀を代表するプレー
ヤーで構成する」という条件が定められ
た。具体的なプレイヤーについては、会員
全員に向けられたアンケートを元に決め
られたのだが、アンケートの意図が十分に理
解されていなかつた場合には疑問が残るところ
で、回答の中には「毛沢東」などとい
う珍答もあつた(もちろん、毛沢東がかみなりの
水泳好きであったことは有名である)。

アンケートで上げられた選りすぐりのブ
レーヤーの中から、編集委員会と学研と
の協議のえす、掲載されているプレー
ヤーのほぼ全員が決定された。その決定
に基づき写真の選考がはじまつたのだ
が、結果として30人前後の会員フォトグラ

ファーの写真しか実際には掲載するこ
とができなかつた。当協会の会員が取材を
はじめた以前のプレイヤーについては、
通信社、新聞社、写真エージェントに頼ら
ざるを得ず、最近活動をはじめた若いフォ
トグラファーの方々は、結局この企画には
参加できなくなつてしまつた。ひじょうに残
念なことだが、写真展の方で頑張つて
いたくということで意見の一一致をみた。

もう一つの大きな問題は、ライバー会員
の協力、参加の方法だった。最初に学研側
から提示されたシミュレーション・デザイン
では、かなりの文字量になり、とても「写
真集」と呼べるようなものではなかつた。
ちょうど「スポーツ・グラフィック ナン
バー」の文字が少なめの頁を連想して
いただければよい。当方としては、文字を
最少限にとどめ、写真を大きく生かしたい
方針だった。しかし学研側からは
「単なる写真集は売れません。図書館な
どに売り込めるよう『スポーツ年表』を付
け、読み物も充実してほしい」

とのリクエストが出て、ある程度その要
望にも応えなければならなくなつた。さっ
そく一部ライバーの方に執筆の意思がある
かどうか意見を伺つたが、ライバー会員
の多くはスペシャリスト(特にサッカー)が
多く、一番必要とされるオールラウンドの
ライバーの方は少なく、しかも「ノーギャラ
では原稿を書かない」という方もいて、特
定の方に負担がかかる結果となつた。中
でも「20世紀スポーツ年代記」を担当して
いたいた宮崎恵理さんには膨大な
原稿をひとりで執筆していただいた。ま
た、内容のクオリティーをあげるために、一部
会員以外の方にも原稿をお願いした。こ
れは結果として良い方に転がつたと思つ
ている。

シドニーの余波

編集作業が遅れ気味となり、一番大
切な時期にシドニー・オリンピックが重なつ
た。企画担当委員長の北川さん、そして
最初からこの写真集の重要なスタッフ
だった藤田孝夫さんらが作業からリタイア
。わたしは名古屋の実家が水害にあつ
たこともあり予定していたシドニー行きを
諦めた。薬師さんを中心編集作業を受
け継いだものの、うまく前任者からハタ
タチがされておらず、再び一から仕切

■村上春樹氏の書いた「シドニー」は売れっ子
作家の目でみたオリンピック論として興味深かつ
た。帯を取つてしまつと少し物足らない装丁になる

抗したが、「1冊でも多く写真集を販売す
る上で必要」との出版社側の判断で、作
家の人の名前が気持ち小さくなつただけ
だった。

現在、スポーツ関係の書籍のなかで一
番売れているのが村上春樹氏の著「シ
ドニー」(文藝春秋社)だそうだが、こちら
の方は帯が無いより有る方が格段によ
い。こんなマスター・プランがあれば、醜い
帯に悩むことはなかつたのだが……。

余談ながら写真展のDMの中に、帯が
巻かれた写真集の装丁写真が使用され
ていたのには少々驚いた。写真集と写
真展のスタッフのコミュニケーションのな
さが気にかかつた。

無名なるが故の無力感

『シドニー』の中で著者の村上氏は書
いている。

「オリンピックくらい退屈なものはないのか?
答えはイエスだ。イエス、イエス、イエス」と。

そのオリンピックの開催中、わたしは
『20世紀スポーツの肖像』の編集をお手
伝いしていた。

そして村上氏は開会式の記述の中で
次のように書いている。

「入場行進はデンマークのあたりで飽き
飽きして会場をでてきた」と。

その時、わたしは名古屋の実家で泥ま
みれになった骨を義弟と家の外に運び

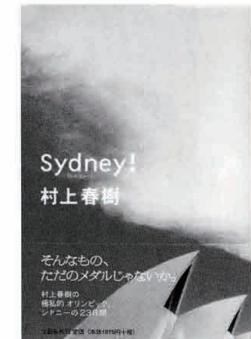
出していた。

村上氏の「シドニー・オリンピック論」
を、わたしは楽しく拝読し、共感した部分
も多かった。しかし、開会式を最後まで取
材せずに「オリンピックほど退屈なものは
ない」と断定する有名な作家の方に、貴
重なADカードが一枚渡されたということに対
しては、スポーツ・ジャーナリズムの末席に
連なる者の一人として複雑な感情を持つた。
このあたりの見解を日本国内の
オリンピックADカード発給権を司っている
JOCの方にうかがいたいものだ。

それはまさに、写真集の帯の問題にも
収斂していくのである。

無名のままでも地道に仕事をこなして
いくなどというのは意味のないことなの
か。この世界、力をつけて有名になるし
か存在意義はないのか。

写真集が刊行された今、そんなことを
感じているわたしである。



Sydney!
村上春樹

そんなもの、
たたのメダルじゃないか
村上春樹の
「シドニー」23日間
上野書店、新星出版社



photo by T.Fujita



photo by T.Fujita

A U T O F O C U S R E P O R T

【撮影データ】

A,B,C
2000年9月2日 長居スタジアム
キリーチレンジ2000
シニアオリビン・サンカー日本代表社行試合
日本代表(U-23) vs クウェート代表(U-23)
シャッタースピード: 1/500
露出: F2.8
ASA感度: 3200ISO増感 中色補正無し
AFモード: AI SERVO AF
巻き上げモード: 超高速連続撮影
使用ボディ: EOS-1v HS
使用レンズ: EF400mm F2.8L IS USM
使用フィルム: FUJI RHP III(ASA400)
機材協力: キヤノン販売株式会社

D
2000年9月5日 国立競技場
キリーチレンジ2000
シニアオリビン・サンカー日本代表社行試合
日本代表(U-23) vs モロッコ代表(U-23)
シャッタースピード: 1/600
露出: F2.8
ASA感度: 3200ISO増感 中色補正無し
AFモード: AI SERVO AF
巻き上げモード: 超高速連続撮影
使用ボディ: EOS-1v HS
使用レンズ: EF400mm F2.8L IS USM
使用フィルム: FUJI RHP III(ASA400)

マニュアル ユーザーの オートフォーカス・ リポート

藤田 孝夫
Takao Fujita

近年、カメラのオートフォーカス技術は飛躍的に向上し、ピントあわせに苦労していくこと自体隔世の感がある。しかしながら、動きの速いスポーツを被写体とするスポーツフォトグラファーにとって、100%オートフォーカスを信頼することは、なかなか勇気のいることだ。そんな難問に、現在でもマニュアル機を主力器材として使用している藤田孝夫氏に挑みでもらつた。



photo by T.Fujita

■わたしが現在でも マニュアル機にこだわるわけ

まず最初に断つておきますが、私はF-1ユーザーです。敢えて「未だに」という言葉を選わないのは、F-1を選んでいる、そういう感覚だからです。

しかしながらそんな私も、EOS-1を使用していた時期があります。ちょうど10年前、90年頃だったと思います。所属していた会社の事情もあって、約1年間EOS-1を使用しました。當時振り返ると、仕事でオートフォーカスを使うという事自体、認知されざる状況だったような気がします。確かに一般的には、オートフォーカスが流行りの時代でした。ただ、プロがいざ仕事を使うとなるとちょっと……、そんな時代でもありました。

第一の理由は、レンズも含めたその“性能”に対する解釈です。確かにEOS-1のフォーカシングスピードは、當時としては画期的なものでした。そのファンダーを覗いた者は異口同音に、「速い」と驚嘆したものです。ただ我々のように被写体がスポーツで、非常に速く、なおかつ不規則な動きをする物体であることを考えたとき、その“性能”という点に関しては、一長一短が色濃くありました。コントラストの弱い時、被写体の手前に雪や

ネットが入った時、どうしてもピントは泳いでしまいます。いわゆる一瞬が勝負のスポーツといふ名の報道の世界で、そのリスクはあまりに大きく感じられました。ただそれらと引き換えにしても、驚く早さでピント合わせを実現してくれるオートフォーカスの魅力は、計り知れないものでした。しかし残念ながら「速い」という感覚は、比較的主觀論にすぎません。より速い被写体と対峙するカメラマンになればなるほど、つまりは我々スポーツカメラマンの方がよりシビアに、その可能性と限界を感じていたのではないかでしょうか。ついていけない速さ、その二つを各カメラマンの中で決定していく過程にかなりの時間がかかる事は、言うまでもありません。抽象的な表現で恐縮ですが、高みを求めるカメラマンを満足させるに至る“性能”までは、'90年当時のEOS-1、及びEFレンズは、もうあわせていなかったような気がします。

第二の理由は、オートフォーカスを仕事で使うという事に対する“抵抗感”です。「スポーツを撮る」という行為に於いて最も問われたのは、間違いなく、速い被写体にピントを合わせる技術です。その限界に挑戦する事が仕事であり、よりピントを合わせられるカメラマンが、最も評価さ

れるような風潮もありました。多くのカメラマンは、多大な経験と引き換えに、ピントを合わせる技術を手に入れてきました。それがこそが仕事であり、競争だったのです。

そんな中でプロ仕様をうたい文句にした、オートフォーカス機種が登場したわけです。もっとも重要な点は、ピント合わせという作業を、カメラが自動でやってくれるわけです。多くのカメラマンが“抵抗感”を感じたとしても、不思議ではありません。実際私も'90年当時、現場でEOS-1を使っていた、「オートフォーカスなんて本当に使えるの?」と嘲笑されたものです。その私が今では「まだそんなカメラ(F-1)使ってるの?」と嘲笑される有り様です。

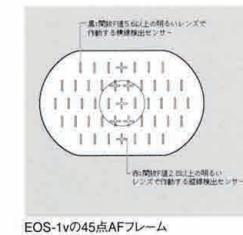
写真の要素について考えた時、大きく分けると3つの柱があると考えます。ピント、露出、構図です。もちろんカメラマンによってその比重が異なる事は言うまでもありません。またそのバランスの違いこそが、カメラマンの個性であるわけです。

ちなみに私が最も大切にしたいのは、構図(フレーミング)です。私はフレーミングにこそ、自分の個性を投影することができる、そう思っているところがあります。私が'91年以降EOSを使用せずF-1を使い続けた最大の理由は、そこにあるのです。

■「しながら」問題を克服した 45点AFフレーム

オートフォーカシングを選んだ時点で、どうしても不可能な作業が出てきます。それは「フレーミングしながらフォーカシングする」

という作業です。「しながら」というのは、非常に重要な部分です。四角いスクリーンの中でピントが合うポイント(点)を指定される(する)事は、自由なフレーミングを拘束される(する)事も意味します。それは私にとっては、致命的なものでした。その意味では、F-1のスクリーンの中で行われる作業は、解放されているといえます。フレーミングながら、フォーカシングで起きるのです。速い動きの中で被写体を泳



EOS-1vの45点AFフレーム



photo by T.Fujita

がせながら、ピントを合わせていくわけです。その構図は、無限です。基本的に、ニュートラルに構えられるわけです。ですがオートフォーカス機の世界では、「ピントを合わせる」という作業と「フレーミングする」という作業は、正確に言うと、別です。「しながら」ではなく、「してから」になってしまいます。

今回、私がEOS-1vを使用させて頂くにあたり最もチェックしたかったのが、「しながら」と「してから」との距離感でした。10年前とどのくらい変わっただろう、そういう想いでサッカーを撮影しました。

まず基本的に、10年という歳月を経ても、EOS-1vは、初代EOS-1と同じ系列の顔をしていました。それは、ベンツやBMWがどれほどモデルチェンジをしても似た顔をしているように、ユーザーにある種の安心感と、風格を感じさせるものです。操作性に関して同じで、一度EOS-1を使用した経験があれば、このEOS-1vの操作も、基本的な部分では難しくありません。ただ、「使いこなす」となると、かなりの時間と熟練が必要だと感じました。

EOS-1vの特筆すべき武器は、エリアAFフレーム(ピントを合わせられるエリア)の中に、45点のAFフレームが点在しており、従来のものに比べてファインダーのより広い範囲でピント合わせができるのです。AFフレームの選択には「自動」と「任意」があります。ただ私としては、自動的に45点のフレームの中からAFフレームを選択してピント合わせをしてくれる「自動」よりも、この45点の中から状況に応じて任意の1点を選択でき、そこにピントを置く「任意」にこそ、魅力と可能性を感じました。

さっそく私は、サッカーの現場で45点のAFフレーム任意選択モード(45点から1点を選択)を試してみました。(※他に2モード<11点から1点選択、9点から1点選択>あり。)サッカーの場合、横位置のフレーミングで、2人のプレイヤーの絡みが必然的に多くなります。そんな時、従来のセンターフォーカス方式では、フレーミングのバランスが崩れがちでした。その事が影響してか、オートフォーカスユーザーの写真は、「比較的継位置が多い」、そう感じています。ですから今回、短い時間での私のテーマは、「横位置でどれだけバランスよく狙えるか」その1点でした。

そこで活躍するのが、45点のAFフレームです。特に左右一番端にあるAFフレームをいかに使いこなすかが、本当の意味でEOS-1vを「使いこなす」第一歩だと考えました。なぜなら中心から離れたAFフレームを使いこなせば、感覚的には、「自由なフレーミング」に近づく気がしたからです。

さて、意気込んでサッカーの撮影に入ったものの、最初は思ったようにいきませんでした。点滅するAFフレームと合焦マークばかりを気にしてしまい、肝心の被写体への注意力が散漫になってしまったからです。そして、ピントと構図を別々に考え過ぎる、という悪循環を及ぼしていました。少し時間の経過と共に、それらの悪影響も解けていました。というよりは、慣れてきました。二人のプレイヤーがボールを奪い合うようなシーンもある程度、自分のイメージに近い形でカバーできるようになっていました。要するに「一人だけが真ん中にきてしまう」というケースは、減ったということです。そういう意味で、今回のEOS-1vの方向性は、非常に好感のもてるものでした。

何度も言いますが、私は「フレーミング」という名の自分の感性をプロジェクトする為に、あるいはより重きを置く為に、マニュアル機F-1を選んでいます。ただ現実の問題として、いつまでもF-1にこだわり続けるつもりもありません。マニュアルという響きにこだわるつもりも、ありません。

いつの日か、EOSの世界の中で、「フレーミングしながらフォーカシングする」という夢が感覚的に実現した時、私は何のよどみもなくF-1を手放すつもりです。そしてあらゆるオート機構がもたらすメリットだけを見つめ、考え、探究していくたいと思っています。

に解釈すると、そのことにより、より被写体に集中できる可能性が生まれます。より「瞬間」に、より「早く」対応できる可能性も、生まれます。私は今回、マニュアル機を瞬間手放した事で、普段自分がどれほど「ピント合わせ」に労力を費やしているか、実感しました。ましてや標準レンズが400mmのスポーツの世界です。オートフォーカスが4つになっているバートの大きさは、他のジャンルには無い、絶大なことがあります。とにかく世界的にも、スポーツ写真=オートフォーカスという組み合わせは、否めない現状です。

■いつかF-1を手放したい

INFORMATION

Kodak

コダック プロフェッショナル DCS620x デジタルカメラ

新発売

メーカー希望価格¥1,150,000

【主な特徴】

- ・13ミクロ正方画素、フルフレーム方式の200万画素大型サイズIT0センサーを搭載。
- ・ISO感度400～6400相当
- ・Lossless圧縮、RAWデータ記録方式。
- ・メモリースティックやマイクロドライブなど様々な記録メディアに対応可能なPCM CIA TypeIIデュアルPCカードスロット。
- ・画像データにボイスメモを添付できる音声マイクを内蔵。
- ・デジタルカメラ初心者にも使い易いGUIの専用ドライバーソフトウェアを標準添付。
- ・国際新聞電気通信評議会規格準拠、PTCデータ対応。
- ・システム開発用API(アプリケーションプログラム インターフェース)を提供。

コダック プロフェッショナル DCS620x デジタルカメラ



■DCSデジタルカメラ7機種を値下げ

DCS330デジタルカメラ

新価格¥380,000(旧¥649,000)

DCS520ベースカメラキット

新価格¥800,000(旧¥850,000)

DCS620ベースカメラキット

新価格¥800,000(旧¥960,000)

DCS520デジタルカメラ

新価格¥880,000(旧¥1,980,000)

DCS620デジタルカメラ

新価格¥880,000(旧¥2,090,000)

DCS560デジタルカメラ

新価格¥1,800,000(旧¥3,600,000)

DCS660デジタルカメラ

新価格¥1,800,000(旧¥3,710,000)

〈問い合わせ先〉

広報部 大崎さん 電話03-5683-4860



CAMEDIA E-10

- ・大容量のリチウムポリマー電池が使用可能。
- ・4種類のISO感度設定。
- ・アルミダイキャストを使用した堅牢性に優れたボディ。

■プロ仕様の機能性、操作性

- ・視野率95%のTTL一眼レフファインダー。
- ・マルチアングル1.8型TFTカラー液晶モニター。

- ・瞬時に実行するモード設定。

- ・フラッシュコントロールシステム。

- ・充実した露出モード。

- ・思いのままの撮影が可能な露出制御。

- ・3種類のホワイトバランスモード。

- ・3種類の画像シャープネスの設定。

- ・3種類の画像コントラストの設定。

- ・マニュアルフォーカス。

- ・マクロモード。

- ・スマートメディアとコンパクトフラッシュに対応。

- ・RAWデータ記録が可能。

- ・USBストレージに対応。

- 豊富なオプションシステム

- ・4種類の高性能エクステンションレンズ。

- ・充実した電源システム。

- ・専用外部フラッシュ「FL-40」。

- ・ケーブルリリースの使用可能。

- ・リモコン撮影が可能。

- その他

OLYMPUS

CAMEDIA E-10

新発売

メーカー希望価格¥198,000

【主な特長】

■プロ仕様の超高画質

- ・総画素数400万画素、2/3インチ原色CCDを採用。

- ・大口径光学4倍高性能ズームレンズ。

- ・独自の画像処理技術(TruePic処理)。

- ・より適正な露出を決定する独自のデジタルESP測光。

- ・肌色がきれいに再現できる新開発のホワイトバランス。

- プロ仕様の機動性、スピード感を実現

- ・デュアルAFによる素早いオートフォーカス。

- ・レリーズタイムラグ約60ms。

- ・最大3コマ/秒の高速連写が可能。



日本スポーツプレス協会

Canon

CREATE

PRO-LAB FOR CREATIVE PROFESSIONALS

 **DESCENTE**

FUJIFILM

HORIUCHI COLOR

Kodak

Konica

 **kosha**

MINOLTA

Nikon

OLYMPUS

PENTAX

